

竹口喜左衛門信義『横浜の記』の研究

—— ミシン初伝をめぐって ——

中山 千代

一 はじめに

『横浜の記』は江戸店持伊勢中万の商人竹口喜左衛門信義の日記である。信義が万延二(一八六一)年正月十四日に、江戸から神奈川に舟行し、成仏寺在任のアメリカ長老教会宣教医ヘボン James Curtis Hepburnの斡旋によつて、外国人商人と貿易の打合せをなし、二十日に帰府するまでの日記と、その後日付はとびとびであるが、文久三(一八六三)年六月十八日まで、横浜外商との取引についてのメモが記されている。江戸の一商人による横浜貿易の手記は、開港初期の貴重な史料である。

この日記は伊勢松阪の郷土史家山崎宇治彦によつて、『新旧時代』第一年九月第七冊(大正十四年九月二十日)誌上に紹介された。その後『植村正久と其時代』(佐波宣編 昭和十三年)、『射和文化史』(三重県飯南市射和村教育委員会発行、山崎宇治彦、北野重夫、昭和三十年三月)に引用されている。また『横浜市史』第二卷(昭和三十四年)には、開港後の製茶貿易にのり出した江戸店伊勢商人の典型として、喜左衛門信義の行動が解明されている。しかし『横浜の記』は伊勢中万の竹口家の蔵から失われて、長らくその所在が不明であった。最近になって同家に無事返戻されたので、現当主竹口作兵衛氏の御厚意によつて実見することができた。

『横浜の記』は一商人の初期横浜貿易のほか、他の記録に見られないヘボンの生活とその周辺の人物などについても、知ることができる

が、またミシン裁縫の興味深い場面が記されている。とくにこのような史料に乏しいミシン史研究にとつて、注目される場所である。わが国のミシン初伝についての史的研究に、『横浜の記』は重要な地位を占めるものである。

二 喜左衛門信義の横浜行

竹口家は伊勢国乳熊郷(現三重県松阪市中万町)に油商を営み、慶長(一五九六—一六一四年)ごろの右衛門太郎義政を初代とする。三代作兵衛義道が慶安年間(一六四八—一五一年)に江戸に出て、日本橋で塗物店を開業、四代作兵衛勝義は元禄初年(一六八八年—)に、深川永代橋橋で味噌醸造をはじめ、乳熊屋作兵衛商店の初代となった。彼は宝井其角に師事し、赤穂浪士大高源吾の俳諧の友であった。泉岳寺へ引き揚げる赤穂浪士一行が永代橋にさしかかった時、勝義は甘酒粥をふるまつてその労をねぎらつたという。大高源吾は当日上棟の乳熊屋のために棟木にその由来を記し、また看板も書き残した。これが江戸の評判となり、乳熊屋は江戸名所の一つになつたといわれている。乳熊屋二代喜左衛門松方は延享二(一七四五)年四月二十五日に、南茅場町にも米穀店伊勢喜を開いた。伊勢商人竹口家は、乳熊屋と伊勢喜の江戸店持として、五代喜左衛門信義に至るのである(下)。幕末・明治初年の江戸の状況を記した鹿島万兵衛『江戸の夕榮』には、永代橋の項に「突当りに有名な乳熊屋という酒店と蒲鉾屋ありし」と述べている。この頃当主であった五代喜左衛門信義(文化九年—明治二年十月二十二

日)が、『横浜の記』の筆者である。

喜左衛門信義は文化九(一八二二)年に、伊勢国飯野郡射和村の竹川家に生れた。幼名を礼藏という。幕末から明治にかけて、射和の名士として知られた竹川政胖竹斎の弟である。文政十一(一八二八)年、十六歳の時、隣村中万の竹口家養嗣子となった。竹川家の江戸店両替商が竹口家江戸店と同じ町内にあり、昵懇の間柄でこの縁が結ばれたのである。礼藏は天保十一(一八四〇)年に家督をつぎ、喜左衛門信義と称した。先代喜左衛門直兒は佐藤信淵と親交があり、信淵の指導を受けて上総国君津郡久保田の荒蕪地に農場を開いた。また『夢物語』を書いて幕吏に追われていた高野長英を、数十日間南茅場町の自宅にかくまうなど(2)、進歩的な智識人であった。この養父の許に成人した信義も勝海舟と親しく、松前の海産物問屋浜田利右衛門、灘の酒造家嘉納治右衛門と共に、海舟の後援者であった。勝の父小吉が乳熊屋近くの油堀に住んでいたところから、その交際が始まったようであるが、信義は勝の思想に深い理解を示すパトロンであった。勝は度々乳熊屋を訪れ、その際種々の書籍を持参した。それは借入金の本代引当、あるいは抵当であり、時には贈物でもあった。信義が勝から入手した書物は、『歴象新書』『亞墨利加漂流記』『佐久間上書』『江川氏存寄書』『砲術全書』等のほかに翻訳本もあり(3)、信義の思想形成に、勝の影響の大きかったことが推察される。また西郷隆盛とも親しく、西郷は乳熊屋の寮で休養することが多かったという(4)。開明的な養父直兄の家庭環境にはぐくまれた信義は、勝や西郷との交友からも時勢に対する洞察を深め、開港後の横浜貿易進出へ積極的な行動をおこすのである。

安政五(一八五八)年に、アメリカ、オランダ、ロシア、イギリス、フランスの五カ国と調印した修好通商条約・貿易章程は、日本を世界資本主義の市場とする自由貿易である。諸外国の自由貿易要求を受け入れなければならない幕府は、開港場の建設とともに、商人の移住をはからねばならない。六年一月十六日(一八五九・二・一八)に、幕府は開港場へ出稼・移住し、自由に商売することを認め、希望者

は各港の役人に申請することを布告した。通商条約では神奈川が開港場であるが、幕府は東海道宿場である神奈川に、外国人が居留して紛争の起るのを防ぐため、隣接の横浜に新しい港を建設した。諸国の領事は幕府の方針に反対して神奈川に止まり、自国商人にも神奈川での貿易を説得する。しかし外商たちは、港が深く土地も広く、地形上神奈川よりすぐれている横浜に商館を開いた。日本側も地元商人のほか諸国の商人が出店して、同年六月二日(一八五九・七・一)に、横浜は開港された。しかし幕府は自由貿易に対して、なお商品経済の封建的規制を行なおうとする。御用商人の江戸問屋たちに横浜出店を命じ、その独占権の擁護をはかるのである。信義は輸出を禁止されている米穀商であり、貿易の対象になり得ない味噌醸造商であるから、幕府の政策に必要な商人ではなかった。しかし彼は横浜開港という新しい時勢に挑戦する機会をねらっていた。万延元年閏三月十九日(一八六〇・五・九)、幕府は五品江戸廻し令を公布し、雑穀・水油・蠟・呉服・糸は地方から江戸へ廻送し、江戸問屋から横浜へ出荷することを命じ、在方商人の横浜進出を規制した。これに便乗しようとする江戸茶問屋が、山方荷主の横浜直売を禁止して、江戸茶問屋による横浜表売捌を幕府に歎願する。しかし自由貿易違反の批難を恐れる町奉行に却下された。産地から横浜に直送する打越荷として、五品江戸廻し令の統制を受けないことが確認されたこの茶貿易に、信義は着目するのである。郷里の南伊勢は茶の生産地であり、射和には有力な実兄竹川政胖竹斎がいる。竹斎を在方荷主とする茶売込は、横浜貿易にきわめて有望であると判断した信義は、同年末に妻のぶを神奈川の知人勝見利という老人の許に遣わした(5)。勝老人は西洋医学を志す越前の医師本多貞次郎を自分の子として、ドクトル・ヘボンの小使に差し出し、修業させていた。信義は勝老人を介してヘボンに会い、その紹介による製茶貿易を行なおうとするのである。

信義は万延二年一月十四日(一五六一・二・二三)に、妻のぶ、小児泰、息子席太郎、手代茂吉、母お糸、供八助を伴って、舟で江戸を出帆した。『横浜の記』冒頭の第一日である。朝五ツ半時(九時)に江戸

を出帆、八ツ半時(十五時)に金川(神奈川)入口土橋に着岸。ゆっくり下船の支度をしようとする、船の付き添人は見廻りが来ると云い、横浜の望遠鏡が見張っていて、見付けられたら船も人も動けなくなる、幸にも荷物は全部持つことができた。惣門に入って、新丁の勝見利を訪い、はたごや「なごや」に移る。本多貞次郎が来て、談話は深更に及んだ。

註 (1) 『ちくま小史』十六代竹口作兵衛記 昭和四十二年六月

(2) 『伊勢店持竹口直兄と信義』山崎宇治彦未定稿 竹口家蔵

(3) 喜左衛門信義の日記 前掲書

(4) 明治末期乳熊屋隠居番頭越山老人談話『ちくま小史』

(5) 『横浜の記』万延二年一月十七日

三 『横浜の記』のミソ

神奈川着二日目の一月十五日に、信義はヘボン成仏寺に訪問する。

十五日 晴 アメリカ 夫婦同居 ドクトル ヘボン子を訪ふ。土産、紙、硯 志

ヘボン子へ、赤絵急須 家内へ。自是前四ツ半時妻子を連貞次郎先に被来。老人と伴と我等と自後行。見るに妻子と手代は、等を妻の部屋にて、種々珍しき品々取出し慰め被居たる也。我等俱に見て煩。其外構訳を聞。ヘボンの部やへ皆入。五歳より十歳迄の子供四人出、琴をしらべ唄をうとふ。夫与同寺奥に宿るアメリカ教主ゴープルの妻の許に至る。惣領娘廿一歳。前四人の子の内二人は此人の子也。二人は朋友の子にして、妻好に付預る所也。廿一歳の娘仕かけて縫ものして見せる。婦人は皆々咄乍、縫ものを止る事なし。暫種々の事を見聞して、ゴープル妻の部やを出る。我等其前貞次郎案内にて、ゴープルの許に至る。紙、硯を見せて難有ふといふて、擲る真似をして出来るといふ。答てよろしむといふ。ゴープルたのみ懸る。寔にヘボン子も居て、座右の説物を見聞す。夫与勝手に至る。ヘボン子も俱に来、色々調度の訳を聞。暫して又ヘボン子妻の部やに入。妻子はアメリカ教主ブラン子の許へ至

る。我等老人ヘボンの子の部やにて緩々遊び退出。ヘボン子送り来。夫与ブラン子の許に入、菓子と本を興ふ。女子三ツ半日本の五つのことし。子以上五人之駒下駄を送る。各悦び相て夫をはきて悦び扱ふ。ブランの妻、娘へ問。足袋をさし何。四人曰タビ。下駄をさし問。ケタ。実に可愛。我是を抱んとす。逃かけたるに母一言云。速に止る。其教甚厳し。妻菓子を出し我党に与ふ。皆々喰す。我齒あしく難喰。妻走り入、和きを与ふ。喰すを見て妻曰、デケマスカ。答デケカマス。此妻女天下の美人愛敬さながら鈴なりといわん。同行の人皆譽る。夫与帰る。尤本は耶穌の名ある故に、倚のいすの上に置残す(1)。

この記にある通り、成仏寺にはヘボン家のほかに、ダッチ・リフトムド教会宣教師S・R・ブラウン Samuel Robbins Brown とバプテスト自由宣教師協会宣教師ゴープル Jonathan Goble の二家族が住んでいた。成仏寺は法燈国師が師岡(現綱島付近)に開き、後小松天皇から熊野権現領寄進宣下をうけた名刹である。慶長年間(一五九六―一六一四年)に、徳川家康から寺領及び境内地三町四方の寄進を受けて浄土宗となつた。寛永七(一六三〇)年、神奈川御殿造立のため現地に移り、元禄年間(一六八八―一七〇三年)に再興された(2)。幕末期の住職は第四十一代隋興上人である(3)。神奈川奉行は外国人住居に寺院を提供した。成仏寺のほか浄滝寺(イギリス領事館)、宗興寺(ドクトル・シモンズ家)、本覚寺(アメリカ領事館)など、この地区の寺院はほとんど領事や宣教師の使用にまかせ、ヘボンやS・R・ブラウンが驚ろくほどであつた(4)。

ヘボンは安政六年九月二十三日(一八五九・一〇・一八)に神奈川に上陸し、アメリカ領事の斡旋で成仏寺へ入った。S・R・ブラウンは同年十月七日(一一・二)、その家族は教週間おかれて十二月に着いた。アメリカ領事はブラウン家も成仏寺に住まわせることを、ヘボンに依頼した。ヘボンは中国宣教師時代からの友人との再会を喜び、快よくその申出に応じたのである。ヘボン家は本堂に、ブラウン家は庫裡に住むこととした。ヘボンは広い本堂を大小八つの部屋に改造し、

部屋の境を日本の襖で区切り、安息の礼拝に必要な場合には、前方の三部屋を開くことができるようにした(5)。庫裡に住む職は隣家に引越したので、ブラウンは二カ月もかかって、すずけた壁と天井を洗い、紙を貼ったり、障子や窓をはめたり、仕切りをつくったりして、住み心地のよい家にする事ができた(6)。

ヘボンとブラウンの住む成仏寺にゴープルが来たのは、万延元年閏三月十一日(一八六〇・四・一)である。ゴープルはこれより以前、嘉永六(一八五三)年に、ペリー艦隊の陸戦隊員として浦賀に來航している。ペリーが香港から連れて来た漂流日本人仙太郎(ペリー艦隊ではサム・パッチ Sam Patch (三八)と呼ばれていた)に興味をもったゴープルは、彼に英語とキリスト教の教理を教えた。仙太郎は日本への上陸を拒んだので、ゴープルはアメリカに連れ帰って教育した(7)。ゴープル自身も神学教育を受けて宣教師となり、仙太郎及び家族を伴って、再び日本へ来たのである。横浜開港後の幕府は、神奈川に外人住宅を与えなくなったので、ブラウンが成仏寺庫裡の台所に小さい部屋を造って、ゴープル家を住ませた(8)。成仏寺のヘボン家はプリントン大学に学ぶ子息サムエル David Samuel Hepburn をアメリカに残し、夫妻だけであった。ブラウン家も長男ロバート・モリソン Robert Morrison Brown をラトガース大学に残して、夫妻、長女、次男、次女の家族である。ゴープル家には二人の幼女があった。

成仏寺を訪れた信義たちは、ヘボンの部屋で子供たちのピアノを聞き、ゴープル夫人エリザ・ウィークス Mrs. Eliza Weeks Goble の部屋でミシン縫を見たのである。二十一歳の惣領娘(長女)が、仕掛けで縫ものを見せてくれた。ミシンを仕かけと呼んでいるが、仕掛とは機械のことで、明治時代にも使われている名称である。ゴープル家の子供は、ヘボンの部屋でピアノを弾いて唄を歌った四人のうち二人で、まだ幼ない。当時三十三歳のゴープル夫人(9)に二十一歳の長女はいない。ミシン縫を見せた長女に該当するのは、ブラウンの長女ジュリア Julia Maria Brown (9) である。一八四〇年生れの彼女は、当年二十一歳(日本流教年)であった。婦人たちと話しながら、ミシン

縫は止らずに進んでいく。信義は驚嘆するが、さらに興味深く見ていたのは妻のぶであった。それは後の彼女の彼女の行動に現われ、『横浜の記』十九日に記されるのである。

信義が成仏寺で会った人々のうち、最も強い印象を受けたのは、ブラウン夫人エリザベス・ゴッドウィン Elizabeth Goodwin Brown である。幼女に対する躰けのきびしい夫人は、訪問者にはやさしくお菓子を御馳走する。そして齒の悪い信義のために台所へ走り、やわらかいものに代えて、食べられますかと親切に問いかける美しい女性であった。信義は「天下の美人愛敬さながら鈴(玲)なり」と讚え、これは自分一人の感嘆ではなく「同行の人皆誉る」と記すのである。信義をこのように傾倒させたブラウン夫人は、わが国最初のドレス・メーカー沢野辰五郎を養成した女性である。この事については、『横浜貿易新報』が明治四十年十一月二十四日から四十二年十二月七日に連載した『横浜開港側面史』(11)に、「女洋服の始」(浅間町 沢野辰五郎翁談)を記している。神奈川本陣鈴木会所から宿内の仕立屋足袋屋仲間に対し、職人一名を成仏寺に差出せという達しがあった。攘夷の激しい時節に応募する者はなく、きびしい催促に、足袋職辰五郎が年も若く何か変った事をとの野心もあって、引き受けるのである。夫人に会って、示された仕事は、ミシン縫の寝台用布団であった。辰五郎はこれを見本として、同じような布団を手縫で仕上げた。足袋職人であるから、ミシン縫のような返し針も曲線縫も巧みであったと思われる。しかし針一本でミシンと同じ仕事をするので、時間がかかる。八時から六時まで、賃錢七百元の取極めはもったいないと思った辰五郎は、夫人に度々その事を申し出ると、夫人はいつも同情的な優しい顔付で、「なに慣れさえすれば段々に早くなる」と云い、辰五郎はようやく布団などを縫いあげるのであった。夫人は目が悪くてミシン縫ができないので、引き続き勤めてほしいと頼まれて通っているうちに、婦人洋服裁縫について親切な伝授を受け、辰五郎は足袋職人から婦人洋服職に転じたのである。明治維新後しばらくの間は、唯一人の婦人洋服職であった。彼が成仏寺に通い始めたのは「月日はシカと記憶致

しません、安政六年の夏の初めの事でした」と語っている。しかしブラウン夫人の来日は同年十二月であるから、記憶違いは明らかである。また彼は「内心はビクビク」もので翌日成仏寺に乘込みますと、夫人が夫れは「御親切で一から十迄手を取らぬ許りに教へて下さる許りか、ブラウン氏でもバラ氏でも、又ヘボン先生でも、誠に鬼と思つて仏さまです」と述べている。ダッチ・リフォームド教会宣教師ジェームス・バラ James Hamilton Ballagh 夫妻が神奈川に来て、成仏寺のヘボン家に同居したのは、文久元(一八六一)年十一月十一日である。バラが成仏寺にいたならば、辰五郎の時期はこれ以後となる。しかし彼の記憶に後の事が混同することもあろう。このように、半世紀を経た年月の記憶は確かではないが、辰五郎のブラウン家入りは、万延、文久年間であつて、信義の成仏寺来訪とあまり距つていない頃である。成仏寺の状況がきわめて詳細な『横浜の記』に、辰五郎のことが記されていないのは、信義訪問が彼に先んじていたのではないかとも思われる。

足袋職辰五郎をドレス・メーカーに育てたブラウン夫人は、来日前一八五二(嘉永五)年、オワスコ・レイク Orasco Lake の教会で、婦人裁縫協会 Ladies Sewing Society を組織した。ブラウンがこの木造の教会を、煉瓦建築に改築する資金を援助するためである。会堂内部の装飾と休憩室は、協会の裁縫の仕事から得た資金で造られた(12)。アメリカのミシンが生産段階に入ったのは一八五三(嘉永六)年からであるから、ブラウン夫人の協会の当初の裁縫はミシンを使用していないであろう。その後横浜でブラウン夫人と生活を共にしたミス・キダー Miss Mary Kidder の一八七〇年十一月十八日(明治三年十月二十五日)横浜発書簡に「ブラウン夫人がみえて、日本の高官が私たちに会いにきていたので、ちょっと来てミシン(13)で縫い物をしてみせてやってくれないかといわれます。ブラウン夫人はミシンのことはあまり御存知なく、熟練していないからミシンに触れることも減多にないのです」(『キダー書簡集』フェリス女学院資料整備委員会 一九七五年)とある。裁縫に堪能なブラウン夫人ではあるが、新機械にはあまりなじんでい

ないようである。しかしその夫人でも、成仏寺時代の家庭にはミシンを所持していた。当時の婦人洋服はすでにミシン縫製時代であり、足袋職辰五郎はドレス・メーカーに育成されるのである。

信義は一月十五日のヘボン訪問後、彼から紹介された外商たちと製茶売込の打合せを行ない、また陶器の注文をするなど多忙な日々を記録しているが、横浜滞在最終日の十九日に、ミシンに関する記述がある。

十九日 雨逗留昼後より晴

のぶアメリカの縫ものを習わんといへる。昨日ヘボン子へ咄す。同妻教へんといふに付、今日至。喜も又いとまこいかね行。ヘボン子右の手を出し互に振りて止む。是彼國の朋友に成たる印也。本國の人といへとも朋友にあらざる人は此事をせず。

ミシン裁縫は「アメリカの縫物」と呼ばれている。信義の妻のぶは、成仏寺で見たミシン縫を習いたいと云うのである。信義は外商との打合せを完了した十八日に、妻の希望をヘボンに伝え、ヘボン夫人 Clara Mary Leete Hepburn の承諾を得ることができた。ヘボン夫人もブラウン夫人と同様に、来日前のニューヨークで裁縫会を組織していた。一八五四(安政元)年のニューヨーク、ヘボン邸の裁縫会には、ミシンが使用されている(同年二月二十三日付、ヘボンから実弟スレーター I. C. ハップバインへの書簡『ヘボンの手紙』高谷道男編訳 昭和五十一年)。この会は懇談の集会であるが、夫人は売り出されて間もない家庭用ミシンを早くも用いているのである。成仏寺を訪れたのぶが、ヘボン夫人からどのような教授を受けたかは記されていない。しかし最後にヘボンと握手する信義の感動には、商取引への感謝、ヘボンに対する尊敬などのほか、夫人のミシン裁縫伝授も加わるさまざまな感激がこめられていたであろう。

信義の『横浜の記』及び辰五郎の『談話』によって、成仏寺宣教師三家庭の、ミシンのある生活様式を知ることができる。そしてこれは成仏寺三家庭に限らず、在留外交官、宣教師、外商たちの生活パターンであった。彼等の家庭のミシンは、居留外人の最も多い横浜の洋風

生活の表象でもあり、わが国の人々の興味の対象となった。一川芳員
の錦絵『外国人衣服仕立之図』（万延元（一八六〇）年版）、橋本玉蘭齋
誌五雲亭貞秀画『横浜開港見聞誌』（文久二（一八六二）年刊）、『異人双
六』（旧版、万延・文久ころ）などに、ミシン裁縫の西洋婦人が画かれて
いる。そのミシンはみな同型で、機械部の描写は正確ではないが、ウ
イラー・アンド・ウイロンン会社 Wheeler & Wilson Manufacturing
Co. の横引ミシンである（14）。

- 註（1）変体仮名を平仮名に改めた。句読点及（ ）内のルビと説明は筆者
が付けた。以下の引用文も同様である。
- （2）『浄土宗神奈川教区寺院誌』成仏寺蔵
- （3）現任職大熊信光師御教示
- （4）『ボン書簡』（『ボン書簡集』高谷道男編訳 昭和三十四年）。ブラウン
書簡(S・R・ブラウン書簡集) 高谷道男編訳 昭和三十四年
- （5）一八五九年十一月二十二日神奈川発 W・ラウリー博士あてヘボ
ン書簡(前掲書)
- （6）一八五九年十一月三日神奈川発 アイザック・フェリス博士あて
ブラウン書簡(前掲書)
- （7）『ペルリ提督日本遠征記』
- （8）一八六〇年五月十四日 神奈川日記 親愛なる友に(『ボン書簡集』
前掲書)
- （9）Eliza Weeks Goble (1828—1882) 『麻太福音書附帯記録』 昭和
十三年)
- （10）Julia Maria Brown (1840. 2. 18—1919. 8. 18) A maker of the
new orient Samuel Robbins Brown By William Elliot Griffiths
copyright 1902.
ブラウンの長女ジュリアはこの後、文久二（一八六二）年に横浜で、
イギリス領事館員ラウダー John Frederic Loder と結婚した。ラウ
ダー夫人は夫死去後も日本に止まり、横浜初期の西洋婦人中、日本
在住が最も長い。横浜外人墓地に葬られる。
- （11）横浜貿易新報社は、この連載を単行本に編集して、明治四十二年に
出版した。
- （12）In Memoriam. Elizabeth Goodwin Brown, The Missionary's Wife.
1890.
- （13）このミシンはオハイオ州クリーブランド製船型下糸巻型と記してい
るので、アメリカのホワイト White CO. の製品である。同社は一八
六一（文久二）年に設立されたウイラー・ウイロンン系で、家庭用ミ

シンを製作した。ホワイト・ミシンは明治初期から大正にかけて、
日本に多く輸出されている。ミス・キダーはこの一八七〇（明治三
年から、ボン塾の女生徒を引き受けて授業を開始した。これが後
のフェリス女学院である。一八七三（明治六）年二月二十一日のキ
ダー書簡に示すフェリス・セミナリーの授業内容には、縫いものが
ある。

（14）本稿関係論文『婦人洋服職人制の展開』中山千代 『立正女子大学
短期大学部研究紀要』第12集 一九七四年。

四 ミシン初伝の系譜

十八世紀後半に織機の機械化から始まったイギリスの産業革命に、
織物の生産量が増大するにつれて、裁縫部門の機械化が志向されるよ
うになった。一七五五（宝暦五）年から裁縫機械の発明が現われるが、
ミシンの形を成したのは、一七九〇（寛政二）年に、イギリスの指物師
トマス・セイント Thomas Saint の作成した皮革縫製用ミシンであ
る。しかし特許をとっただけで、実用化しなかった。彼に続く数人の
発明も、実用化されなかった。製造された最初のミシンは、フランス
の仕立屋バルテルミー・ティモニエ Parthelemy Thimonier が、
一八三〇（天保元）年に特許をとった鎖状縫目の環縫ミシンである。彼
は翌年までに八十台のミシンを造り、縫製工場をパリに建設して、フ
ランス軍のために軍服を縫った。しかし仕事を失うことを恐れた裁縫
師たちによって、そのミシンは破壊される。ティモニエは木製から金
属製へとミシンの改良をはかり、アメリカの特許をとったが、あまり
かえり見られず、貧困のうちに死去した。

ヨーロッパで発明されたミシンは、その後アメリカで発達する。ニ
ューヨークの機械工オルター・ハント Walker Hunt は一八三四（天
保五）年に、鎖状の縫目でなく、二本の糸で堅くしまる縫目のミシン
を造った。これは本縫と称し、現在のミシンの縫目をはじめて出来上
ったのである。しかし直線だけで、布送りもできなかった。送り装置
に成功したのはエリアス・ハウ Elias Howe である。各地の紡織工場
で働らきながら研究し、四六（弘化三）年にこのミシンを完成して特許

をとった。人々は彼のミシンが手縫よりすぐれている事を認めたが、裁縫師たちの反対運動のため、商業的成功は困難であった。ホウはイギリスに渡り、知り合った工場主に、彼のミシンを使ってコルセットを縫わせた。これも成功せず、失意のうちにアメリカに戻ったのは四九(嘉永二)年である。帰国したホウは大衆の関心がミシンにむかっていること、彼の特許を侵害してミシンが造られはじめていることを知った。ホウのミシンは今日のミシンの基本的な部分をいくつか具備しているが、速度は遅く騒音の激しいものであった。しかし彼はミシン時代の来ることを感じて、自分の権利を守る告訴にのり出すのである。

ミシガン州の指物師アレン・ウイルソン Allen B. Wilson は四九(嘉永二)年に、自動送り装置を付けた本縫ミシンを完成する。またこれまでと異なるメカニズムの回転鉤を発明した。これは現代のミシンのカマの基を確立するものである。一八五一(嘉永四)年八月十二日に特許をとった。彼は事業家ナザニエル・ウイラー Nathaniel Wheeler の協力を得て、ウイラー・ウイルソン会社 Wheeler, Wilson & Co. を設立した。足踏式の優秀なミシン、ウイラー・ウイルソンはまづ縫製工業に、ついで家庭裁縫に進出する。ボストンの機械工アイザック・メリット・シンガー Isaac Merritt Singer の本縫ミシンが完成し、特許をとったのは、偶然にもウイルソンと同じ日であった。シンガーのミシンは布地を前にずらして傷めず、縫いながら方向転換することができ、従来などのミシンにもない劃期的な押えがねは、厚地にも自動的に適応するものであった。ウイルソン及びシンガーに至って技術的発展をとげたアメリカのミシンは、西部開発に市場を拡大する既製服産業の基盤として、五五(安政二)年以降生産量が激増する(1)。日本にペリーが来航して日米和親条約が結ばれ(一八五四年)、通商条約も締結して(一八五八年)、開国しなければならなくなった頃である。

わが国へのミシンの初伝は、ウイラー・アンド・ウイルソン会社から將軍家定への贈物である。これは一八六二年四月五日(文久二年三月七日)の『ニューヨーク新聞』第三百三十号に掲載され、わが国の

『海外新聞別集』に、次のように翻譯されている。

「日本より贈物の事」

日本の当万延大君よりホエーレル及びウキルソンの組合より前大君に進上したる美事なる縫道具の返礼として亜国ミニストル、トオセントハリスに頼て右の組合に基た珍しく且つ貴むべき数多の品物を贈れり、是は種々に彩色して何れも長サ五ヤールの天鷲絨五巻と金銀の綾模様ありて、種々の鳥或は花を画きたる何も立方一ヤールの貫き絹五巻なり、但し其鳥の中には其色黒して異形なる鳥數十羽並に奇麗なる牝鶏の周圍に牡鶏雛の集れる有様を画きたり。今此織物はクラールホルドの作なるデンシングセンニーの華麗なる肖像と共にホエーレル及びウキルソン組合の展覧場の飾物としてあれり。外国珍器を見るを好む輩は日本製造の器械も常に探索すべし。予等ハリスの知らせにて聞たるに、亜国夫人の如く前大君の寡婦は右進上したる縫道具を玩りと。(『官海外新聞別集』上巻 『幕末新聞全集』3 所収)

アメリカ駐日総領事タウンSEND・ハリス Townsend Harris が安政四(一八五七)年十月二十一日に、江戸城で將軍家定に謁見した際の贈物、望遠鏡、晴雨計等十三品の中にミシンはない(ハリス『日本滞在記』一八五七年十二月二十一日)。ウイラー・ウイルソン会社から贈ったミシンは、ハリスの公式な贈物には含まれないものである。或はまたハリス来航以後の、別の船便で贈られたものであろうか(2)。家定は翌五(一八五八)年八月十四日に歿したので、次の將軍家茂が、文久二(一八六三)年にハリスの帰国に託して、返礼の品を贈ったのである。贈物のミシンは家定の末天人璋院が愛用していることを、ハリスは会社に伝えている。

將軍家定に献上されたこのウイラー・ウイルソンのミシンは、わが国初伝の第一ルートである。第二ルートは年代的に右に次ぐものとして、『横浜の記』などに示される西洋婦人家庭のミシンである。わが国にもたらされた最初のミシンとして有名な中浜万次郎のミシンは、第三ルートとして設定される。

ハリスによって締結された日米修好通商条約批准書交換のため、幕府は万延元(一八六〇)年に、使節新見正興一行七十七名と護衛艦咸臨

丸をアメリカに派遣した。咸臨丸の通舟主査となったのが、中浜万次郎である。彼は土佐国中ノ浜の漁民であった。天保十二(一八四一)年正月、十四歳の時、出漁中暴風雨にあって無人島に漂着したところを、アメリカの捕鯨船に救助された。船長は万次郎をアメリカに伴ない、学校教育を授けた。万次郎は成人後捕鯨船員となって出航していたが、嘉永四(一八五二)年にアメリカ船に便乗して帰国した。土佐藩主山内容堂に召し出されて教授館に出仕し、六(一八五三)年には幕府に召し抱えられて直参となった。西洋型帆船の建造、軍艦教授所教授、捕鯨術伝授、英会話書編纂などに、彼の新智識が活用され、咸臨丸派遣に当って通訳に任ぜられたのである。アメリカに同行した万次郎がサンフランシスコでミシンを購入したことは、ひろく知られている(3)。

ミシンの量産が開始されてから五年を経た当時のアメリカでは、衣服産業の工場ミシン発展について、ミシンは市民生活にも誇らしい機械であった。咸臨丸軍艦奉行木村喜毅は、サンフランシスコで造船局士官の家に招かれた時、その家の娘のミシン縫を見せられた。ミシンは当家の自慢であり、はじめて見る日本人には「其器極めて簡便にして足にて踏めば機関自然に転旋し緩急意のこく其奇巧なるに堪えり」(木村喜毅『奉使米利堅紀行』)という驚ろきである。また使節一行のアメリカ各地での写生画が新聞に掲載されている中に、ワシントンの宿舎ウィラード・ホテル Willard Hotel のミシン縫見物図がある(4)。日本使節団の四名がミシン縫の婦人をかこんで熱心に見ている図の、アメリカの誇りと日本人の驚ろきの対比は、サンフランシスコにおける木村喜毅の場合と同じである。随行員勘定組頭森田岡太郎の記録によれば、ミシン見物の場所はホテルの縫物所である。彼はミシンを「車仕懸ケ之品」と記している(森田岡太郎稿『垂行日記』四月朔日陽曆五月二十一日『万延元年遣米使節史料集成』第五巻所収)。このミシンがウィラー・ウィルソンミシンであることは同図の下方に附記されている。当ミシンはすでに家定に贈られて、江戸城にある。また横浜西洋人家庭で使用され、画家たちの描いたミシンと同型の横引ミシンであ

る。サンフランシスコで中浜万次郎の購入したミシンは、万延元(一八六〇)年の帰国に持ち帰られたが、使節団の人々もミシンを持って帰国したことは、使節の乗船ボーハタンの乗組士官ジョンストン中尉 Lieut. James D. Johnston U.S.N. の日記に明らかである(5)。使節には遊戯のカルタから裁縫ミシンに至るまで多種多様の贈物があり、「彼等は其後此裁縫器械を巧みに使用するようになったと云ふ事である」と記している。しかし万次郎のミシンは使節の贈物ミシンと異なつて、彼自ら購入したミシンである。彼はミシンと共に写真機も購入し、かつてのアメリカ生活にまだなかった新機械への執心である。そのほか測量機、オルゴール、拳銃等を機会あるごとに輸入した新文明の先駆者としての栄光が、万次郎のミシンをとりわけ輝かせたのである。そして万次郎のミシンは、わが国ミシンの嚆矢とされているのである。しかしミシンはすでに日本に入っているため、万次郎のミシンは日本人による初伝と云うべきであり、第三ルートとして設定されるものである。

中浜万次郎の持ち帰ったミシン三台のうち一台を、東京芝愛宕下の軍服裁縫業植村久五郎が百二十両の高価で買い受けたという。これは『東京洋服商工同業組合沿革史』(同組合神田区部編纂、昭和十五年)が伝えるところである。同組合第二次副組長(大正四十七年)、第三次副組長(大正七十九年)、第七次組長(昭和十一年七月—十二年二月七日)、をつとめた植村久五郎は、中浜万次郎からミシンを購入した植村久五郎の子息である。初代久五郎は大正三(一九一四)年まで生存し、子息が業界の重鎮であったため、植村の最初のミシンについては、業界によく知られていた。このミシンは横浜から漁船に積んで江戸へ輸送中、風雨のために六郷川に逃げこみ、止むなく此処で陸上げして、芝の宇田川町まで駕籠で運びこんだという。当時の人々はミシン縫を切支丹の幻術だと騒いだので、植村はミシンを二階に隠し、人目にふれぬように使用した。遣米副使であった村垣範正からその剛氣をみこまれ、海軍服裁縫に推挙されたので、その後、海軍服商として発展した(6)。わが国のミシン初伝がアメリカのミシンであったことは、世界にお

けるアメリカ・ミシン工業の優位性に基づく。またアメリカ・ミシンの中のウィラー・ウィルソンミシンが輸入されているのも、初期ミシン時代の当社の盛況が波及したのである。受け入れ側の日本では年代順に、前述のような個人的形態の三つのルートが認められる。洋服業の職業用ミシン、輸入商社取扱品としての産業形態のミシン受容は、慶応年代に至るまで見られない。一八五九年十一月二十二日(安政六年十月十八日)神奈川発、ニューヨークのラウリー博士あてのへボン書簡に、「衣類はまったく本国から送ってもらうほかありません。日本では毛織物がないし、洋服屋も見ません。この点中国より不便です」(『へボン書簡集』前掲書)とあり、翌六〇年五月十四日(万延元年閏三月二十四日)にも、「毛織の上衣がほしいのですが、この地では得られませんので、数日前に上衣とズボンをマッキン氏とランキン氏に注文を出したのです。それらを発送していたらよいのですが、もしまだ送ってなかったら是非お送り願います」(『へボン書簡集』前掲書)と、依頼するのである。

しかし、安政七(一八六〇)年の在住欧米人約四十四名(幕府調査)から、慶応年中(一八六五—一八六八年)には千百三十名となり(『横浜開港五十年史』下巻 横浜商工会議所 明治四十二年)、増大する彼等の衣服需要によって、洋服業が開かれるのである。安政開港時からの蘭商、バタケイ Batake(『御開港横浜大絵図二編外国人住宅図』)が、いつ頃から洋服を扱うようになったか不明であるが、一八六四(元治元)年に本町通七十七番 マークス H. Marks & Co. (7)六七(慶応三)年には五十二番 ロスモンド、ウィルマン Rothmund, Willman & Co.、五十三番 ラダージ、オエルケ Ladage, Oelke & Co.、七十番 シロウィッツ Jelovitz & Co.、八十一番 ウィリアム・ホプリン William Hoplin & Co.、八十二番 マケックニー Makeeny & Co. が見られる(8)。このうち、ロスモンド、ウィルマンとラダージ、オエルケは注文立も行いうターラーであるが、その他の商館は武器・弾薬輸入商であって、その付随商品衣服・羅紗は、主として軍服及び軍服生地である(9)。またわが国での最大の需要は軍服であった。六六(慶応二)年に幕府

がフランスに注文した武器・武具のうち、軍服九櫃、木綿繻絆三千、下股引千五百の既製服はすぐ使用できるけれども、紺羅紗百二十枚、羅紗四櫃、兵卒着用羅紗千三百二十四枚、股引羅紗九櫃の大量な毛織地(10)は、ミシンでなければ早急に仕立てることができない。日本にもミシンによる軍服産業成立の条件が生じるのである。

ミシンが輸入商品として扱われるのも、慶応年間からである。慶応三(一八六七)年に、開成所は教授を横浜へ派遣してミシン縫を習わせ、翌四(一八六八)年二月にその伝習を開始した。それは『中外新聞』第一号(慶応四年二月三十四日出版)で布告され、一般に公開した。

西洋新式縫物器械用法伝習并に御仕立物の事

右器械はシウインマンネと名くる精巧簡便の品にて、近年舶来ありと雖も用法未だ弘らず、依て去年官命を蒙り横浜に於て外国人より教授を受け、尚ほ又海内利益の爲に伝習相始め候間、望の御方は開成所へ御尋ねなさるべき候。付ては伝習の序何にても注文次第廉価にて仕立物致すべく候。依て此段布告に及ぶものなり。

慶応四年二月

開成所にて 遠藤辰三郎

これは開成所の物産学の仕事であろうが、名門の青年を集める洋学研究・教育機関が、新聞を利用して、伝習と仕立物を公募する異例な措置である。時は恰も戊辰戦争の最中であつた。幕府瓦解の動乱期に、新時代へ転換する鋭い感覚が、ミシン裁縫への熱意に表出されている。開成所の購入したミシンについては不明であるが、当時わが国に売込をはかったミシンに、アメリカのフロレンス・ミシン Florence sewing machine がある。「此「フロレンス」という縫道具は縫道具中最も驚べき者にして此を用ゆるときは一人にして凡数人の仕事にひとしくたいい半時の間に二十間餘をぬふべしそのうへ直段もいとやすく此をつかふにさまで手ぎわもいらすして笹縁衣服鞋靴等の縫物にきわめて妙なるにより横浜村にて往々この道具を用ゆるものあり」ア

メリカ」においては此道具を用ゆる者甚多く其数千をもってかそふるなり但しこれをおもに商内するところは「サンフランシスコ」の「モントゴメリー」通百十番「ヒール」といふみせなり」と『万国新聞紙』(11)に宣伝した。右広告の図に示す型式は、ウイラー・ウイロン型横引ミシンである。横浜には海岸第二番ウオルシュ・ホール商会 Walsh, Hall & Co. のように、船蒸気器械、軍用諸器、日用器物など、すべての外国商品を取扱う商社がある。ミシンはこうした商社への注文品として輸入されるのであって、特定商館の専属商品となるほどの勢力はまだなかった。

『日本洋服沿革史』(大阪洋服商同業組合編纂 昭和五年)は、慶応四年の夏にドイツ人アーブルヒがドイツ製横引環縫ミシンを輸入し、始めてこれを横浜のインデアスト商會に陳列販売したが、一台八十兩(換算六十五ドル)の高価なミシンは、あまり売れなかったと伝えている。また『東京洋服商工業同業組合沿革史』(前掲書)には、明治初年に浅草雷門で、ミシンは見料三銭のみせものになっていたとある。ようやく商品として輸入されはじめたミシンも、両書の伝えるような珍品であり、新機械を受容する産業機構は、まだ築かれていないのである。

註(1) 各種文献のミシン発明年代は、部分的に異なるものがある。本稿は

Encyclopedia Americana, First Published in 1829による。

(2) このミシンをペリーの贈物とする論がある(『日本裁縫ミシン史雑感』吉田元氏『日本ミシン産業』一〇〇号 昭和四十一年、『蛇の目ミシン五十年史』昭和四十六年)。しかしペリーの贈物の返礼が、八年後のハリス婦人に託されたとするのは、妥当でないであろう。

(3) 『中濱萬次郎伝』 中濱東一郎 昭和十年。『新ジヨウ万次郎伝』エミリー・ワリーナ 田中至訳 一九六六年。『中濱万次郎の生涯』中浜明 一九七〇年。

(4) 『萬延元年遣米使節圖録』田中一貞 大正九年。旧ウイラード・ホテル蔵、新聞掲載写真画。

(5) Lient, James D. Johnston U. S. N., executive officer of the Powhatan, China and Japan-being a narrative of the cruise of the U. S. Steam Frigate Powhatan, in the year '58, '59 and '60, including an account of the Japanese Embassy to the United States: Philadelphia 1861. (前掲書附録「米人の見たる萬延日本使節」)

(6) 本書はこのミシンを「伊太利製二重台ミシン」としているが、伝聞の誤りであろう。また村垣範正は「御船手役」とあるが、誤りである。村垣の家は代々幕府庭番を勤め、国事探偵であった。蝦夷地を巡見し、安政三年から文久二年までは箱館奉行である。万延元年遣米副使をつとめた。

(7) The Chronicle and Directory for China, Japan & the Philippines, for the Year, 1864.

(8) 『萬國新聞紙』慶応三年

(9) The Chronicle & Directory for China, Japan & Philippines, for the Year, 1865.

(10) 『萬國新聞紙』慶応三年

(11) 『横濱開港五十年史』下巻 商工会議所 明治四十二年

五むすび

わが国ミシンの初伝は、ミシン使用の商・工が構成されていない社会への、個人的形態であった。初伝には三つのルートがあり、各ルートの特徴が認められる。贈物として江戸域に入ったミシンのルートは、幕府旧体制の崩壊と共に消滅した。これに対して、横浜西洋婦人家庭のミシンと中濱万次郎のミシンの二つのルートは、その個人的形態から発展して、明治維新後の新産業、洋装業形成につながるものがある。

成仏寺ブラウン家のミシンで、家庭裁縫の手伝をする足袋職辰五郎は、ブラウン夫人の親切な指導をうけて、ドレス・メーカーに成長する。明治初期から中期に初代ドレス・メーカーとなった業者には、辰五郎と同様に西洋婦人家庭の専属裁縫師となつて、新技法を習得した者が多い。彼等はこれを「入り仕事」と称した。西洋婦人ドレス・メーカーの開業はまだ見られない時期に、未知の技法を習得するには最も都合な方法である。辰五郎は一人親方で弟子を取らずに一代を終つた。明治初期に独立開業して弟子を養成し、業界にその系統を残した片山喜三郎、伊藤金作、柳原伊四郎等の入り仕事先は、アメリカ商人デビン家と伝えられている。また横浜の初期業者大谷清二郎、横田弥吉、富田猿造、東京の田中栄次郎、高木新太郎等も入り仕事出身

と伝えられている。入り仕事先がブラウン夫人のような裁縫技術指導者でない場合でも、見本のドレスがあり、裁縫ミシンがあれば、職人たちは工夫をこらして、その技術を磨いていくのである。『横浜の記』に記すようなミシンのある西洋人家庭の生活様式に、わが国のドレス・メーカーが育成されるのである。在留欧米人が増加する明治になると、西洋婦人ドレス・メーカーが開業する。一〇八番 ピアソン Mrs. Peason (慶応三年—明治三年営業期間、以下同じ)、一二九番 キッド Miss Kidd (明治元年)、デーヴィーズ Mrs. Davis (明治三十七年) である(1)。しかし数店のドレス・メーカーでは在留西洋婦人衣服の需要を満たされない。維新後の新しい社会には、日本人開業の条件も整えられ、入り仕事に技術を習得した職人たちが、最初に独立開業して、わが国の洋装業初代が成立する。彼等は江戸以来の徒弟制によって親方となり、弟子を養成して、業界が形成されるのである。このように西洋人家庭内のミシンのルーツは、入り仕事から婦人服業界に拡大されていく。

初期ドレス・メーカーの仕事はほとんど西洋婦人服縫製であったが、男子服業には幕末から軍服の需要があり、維新後の新制度に軍服・制服の大量需要が起った。さらに明治五(一八七二)年の服制改正に宮廷・官界の公服が洋服化され、文明開化の社会に洋服が普及する。在留欧米人の増加に加えて、日本人の洋服着用者も増大するので、西洋人テーラーの開業が相次ぐのである。幕末から開業しているロスモンド、ウイルマンとラダージ、オエルクのほか、明治元(一八六八)年には、三十一番 エステデル James Estale、六十一番 ドリスコール Driscoll & Co. が開業し、中国人テーラーも開店した(2)。長崎・神戸にも西洋人、中国人が業界をつくった。これ等のテーラーのもとで、日本人の技術習得が行われるのである。横浜最古の洋服裁縫師と云われる増田文吉は、オランダ人バタケイ Battakei の出身と伝えられる。バタケイは商館名簿に商人と記録されているので、既製服輸入商であろう。また足袋職人関清吉は、ロスモンド商会の裁縫師ブランド P. Brandt について、技法を習得した(3)。男子服業者は早くから開

業している西洋人テーラーに入店して、技術を習うことができたのである。婦人洋服業のような入り仕事は必要でない。はじめてミシンを用いた長物師出身植村久五郎の技術習得過程については明らかでないが、横浜で修業したとの云われるのは、当時の正常な修業システムである。植村久五郎が中浜万次郎のミシンを入手したのは、男子服業成立パターンに関連する。婦人服業の入り仕事出身、男子服業の西洋人テーラー出身という技術習得過程の相違によって、西洋婦人家庭のミシンのルーツはドレス・メーカーに、中浜万次郎のミシンのルーツはテーラーにつながるのである。万次郎のミシンと同じくアメリカから持ち帰られた遣米使節のミシンは、第三ルーツの中で何の発展も示さない。贈物であったミシンは、個人形態に止まった。万次郎のミシン購入の意図が、時勢の進展に乗るものであって、第三ルーツとしての時代的発展を示すのである。

欧米のミシンはその発明期に、裁縫師たちの激しい抵抗を受けた。手縫から機械への過程で起きたミシン騒動 sewing machine riot は、職を失うことへの旧裁縫師の恐怖であった。わが国にはじめて伝えられたミシンは、新産業に不可欠な機械であって、洋服業はミシンを伴って成立する。幕末攘夷期に伝わったミシンは、植村久五郎の事例に示されるような恐怖感を与えているが、ミシン騒動を起した欧米の恐怖感とは全く異なるものである。また婦人服、男子服ともに西洋人の許での修業には、攘夷家に生命をねらわれる危険もあって、この業は男子によって成立した。洋裁師を求めたデビソン夫人は、最初に女性を希望していたと伝えられている(4)。欧米では、ドレス・メーカーは女性の職業であった。わが国でも和服裁縫は家庭女性の主要な仕事であり、職業的にも男子長物師に並ぶことができた。封建社会の数少ない女性の職業でもあった。しかしデビソン夫人の希望が達せられなかったように、幕末期の社会状況では、ミシン裁縫は女性に関係なく、男性に掌握されるのであった。横浜では婦人服業者もテーラーと呼ばれている。それらは、みな男性だったからである。アメリカの縫物を習いたいと云い、ヘボン夫人から教授を受けた『横浜の記』の信義妻

のふには、町人女性の積極性が見られる。しかし当時のミシン裁縫の実態は、この熱心な女性を初伝の第二ルートに取り入れることはなかった。それは辰五郎に示される入り仕事の男性によって、社会化の道につながるのである。ミシン裁縫が女性に開かれるのは、シンガー・ミシン会社の世界的企業への発展と、わが国の婦人洋装の普及する歴史の経過を辿らなければならないのである。

註 (1) The Japan Gazette Hong List and Directory 1868—84.

(2) The Chronicle & Directory for China, Japan & the Philippines 1868.

(3) 『横浜成功名譽鑑』横浜商況新報社 明治四十三年

(4) 『洋裁師不問物語』西島芳太郎(デビソン家出身片山喜三郎から三代目の弟子) 昭和四十九年